
IS-インフィニット・ストラトス-知識を求めるもの

rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS—インフィニット・ストラトス—知識を求めるもの

【Nコード】

N8257X

【作者名】

rei

【あらすじ】

世界にはさまざまな不思議であふれている。

この世界で何かを証拠にして説明することはそれを否定する証拠にもなりうる

この世界に”絶対はない”

プロローグ

この世界には100%と0%は存在しない

誰が言った言葉かはわからないがその言葉は俺にとって衝撃的だった

この世界にはさまざまな理論や常識がある

しかしその言葉はその理論や常識をただ受け入れていた俺にとって
確実に変化をあたえた

そう

「絶対」なんてものはこの世界のどこにも存在しない

なぜならそれを定めたのもそれに縛られるのもすべて同じ人間なの
だから

だから俺はありとあらゆる知識を吸収した

そして理解した

人間の定めた「絶対」を超えるにはなによりその「絶対」を知らなければならぬ

そんな生活をするようになってから3年

俺が8歳のとき

世界の「絶対」は覆された

「IS」「白騎士事件」

その二つは今までの世界を完全に塗り替えた

俺の両親はもともと軍関係の仕事をしていた

だが「IS」の登場により立場を失い母と一緒に自殺してこの世を去った

それについて何か思うところがないわけではなかったがそのときのおれは両親の死よりもあらたに現れた「IS」についての興味でい

っぱいだっ

既存の理論の壁をやすやすと越えるオーバーテクノロジーの塊

ぜひともそれについて触れたいと思った

しかし問題があった

そう「IS」は女性にしか使えなかったのだ

それゆえに世界は女尊男卑の社会が浸透し、いつしかそれが当たり前となった

「ISが使えるのは女性だけ。ゆえに女性のほうが優れている」

それについても俺は特に思うところはなかった

世界がその傾向にあらうとも俺には関係ないからだ

だがその常識「ISが使えるのは女性だけ」という理論が「絶対」と信じて疑わない世界は気に入らなかった

なぜありのまま受け入れる？

なぜ信じて疑わない？

なぜ？なぜ？なぜ？

だから俺は「IS」について学んだ

開発者 篠ノ之束の論文を読み存在しうるすべての「IS」に関する本を読んだ

そしてそのかいあって12歳にして「IS一級整備士」の資格を得ることができた

至上最年少での記録に興味をしめした倉技研の勧誘を受け俺は倉技研に所属することになった

そしてそれからさらに2年 「IS」について研究開発をしそれが認められついには倉技研のIS部門総責任者まで上り詰めた

ほんとに俺みたいな年齢のやつに任せていいのか気になるところだ
がいいといっている以上気にしないことにした

そしてあるひ俺のもとに依頼が来た

「日本の代表候補生の専用機を作ってほしい」というものだった

俺達はすぐに製作に着手した

ベースとするのは日本で今一番つかわれている「打鉄」と呼ばれる
量産機

それをもとに改良をすすめ専用機とすることになった

仮の名称は「打鉄二式」

開発は順調だった

当初の予定より高性能な期待に仕上がる予定だった

だがそこで事件が起きた

なんと俺が「打鉄式式」を起動させてしまったのだ

原因はわからない

いままでも「IS」に触れることはあったが起動させたのは初めてだった

「打鉄式式」はすぐに「初期化」と「最適化」を完了させ俺の専用機になってしまった

かくして俺は図らずして世界の常識を覆したのだった

IS学園入学（前書き）

作者のハートはガラスです

感想は歓迎ですがあまりきついと作者のハートが砕けてしまいます

IS学園入学

おれがISを起動させてから2ヶ月

俺はIS学園に入学していた

もちろん俺の意思ではない

俺がISを起動したのはすぐに日本政府に伝わった

それを知った日本政府は俺を保護の名目でIS学園に入学させるとともに世界に”ISを動かせる男”として宣伝するつもりらしい

しかし自体は政府の思惑通りには行かなかった

なぜなら俺は最年少の倉技研所属のIS開発者であり簡単に異動はできなかったからだ

俺はすでに開発者としての力は世界中の開発者の中では有名だった

なにせ第三世代の技術といわれる”イメージインターフェイス”の

開発者は俺なのだから

そんなわけで俺はISにおいての発言権、影響力ともに政府のそれをしのいでいるのだった

そこで俺はIS学園に入学するときに条件をいくつか出した

1. 学園内設備施設の自由使用
2. 有事の際の独自行動の承認
3. 学園のIS「打鉄」を二機譲渡する
4. 授業中における行動への不干渉

以上4つを認めさせた

3つ目のISの譲渡は非常に渋ったが俺の開発したISのデータが取れるのならやむをえないとして泣く泣く認めた

かくして俺はIS学園に入学した

「私は副担任の山田真耶です。どうか皆さん、一年間よろしく願いますね」

いま教壇のところで話をしているのは山田麻耶

俺のクラスの副担任である

ちなみに今の先生の挨拶に対しての生徒からの反応はなかった

「えっとそうですね・・・、それでは最初のSHRは皆さんに自己紹介をしてもらいましょう」

先生は気まづくなった空気を振り払うためにそう提案する

それにしたがいみんな簡単に自己紹介をしていく

俺は苗字が霧生なので五十音順でいくと最初のほうなのだが今はとくにくくりなくみんな座ったいるため苗字を気にする必要はない

ちなみに俺が座ったいるのは廊下側から2列目の一番後ろで今は窓側から紹介して言っているので当分は回ってこない

・・・それにしてもやはり予想していたとはいえかなりきつい状況だな

自分以外全員女子というこの状況は

いや、もう一人いたな

たしか名前は「織斑 一夏」だったような気がする。前に俺と一緒にテレビで扱われていたはずだ

今は一番前の席に座っている

後ろから見るとかなり挙動不審だな・・・

まあそれもしかたないな。俺が一番後ろに座っているので横からの視線しかないがあいつは一番前。つまりは自分の全方向から女子の視線を受けていることになる。

俺だったら・・・考えたくもない状況だな

「・・・くん、・・・くん、織斑一夏くん」

「は、はい!!」

俺がそんなことを考えているとどうやら織斑の番になったらしい

あまりに緊張していたからなのかはわからないが上ずった返事を返してしまう織斑

とうぜん周りからはくすくすという笑い声が聞こえそれがさらに織斑を緊張させる

「ひゃ！？あ、あの・・・お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな？もしそうなら、ごめんね、ごめんね！！」

その織斑に対して自分が大声を出したことにたいして怒っているのではないかと聞いている山田先生。なぜか目じりには涙がたまっていて今にも泣き出しそうだった。

こんなんで副担任、いやこのクラスをまとめることができるのだろうか？

俺が言うのもなんだがこのクラスは相当おかしい編成をしている

男性でありながらISを動かせた”俺”と”織斑”だけでも相当ことだがそれだけではなくこのクラスには篠ノ之束の妹がいる

さらには対暗部暗部組織”更識”の従者までいる始末

そのほかにもイギリスの代表候補生もいて相当カオスな編成になっている

個人的にはデータがとりやすくなるのでありがたい話なのだがそれをまとめなければならぬ立場からすれば相当頭の痛い話だろう

このクラスの担任は誰なのだろうか

もしまとめられるような人物ならその人は人間ではないな

「ほう、だれが人間ではないんだ？」

俺がそんなことを考えていると俺の後ろから突然声がかかった

そこを向くとなんとそこにはかのブリュンヒルデ”織斑 千冬”がいた

あゝやっちゃったかな〜と思っていたとブリュンヒルデがもう一度問うてくる

「もう一度聞こうか。だれが人間ではないんだ？」

「あゝそれはあなたですよ。ブリュンヒルデ」

隠しても無駄そうだから俺は白状することにした。だってなんか「うそをついたら 殺す」みたいな雰囲気してるんだもん

「その名で私をよぶな。ここでは織斑先生だ」

「はあ、それでなんでここにブリュンヒルデじゃなかった織斑先生がいるんです？」

俺が心底なぞに思っていると今まで黙っていた俺の隣の席の生徒が答える

「それはね〜なっちゃん、織斑先生が〜このクラスの担任だからなのだよ〜」

今答えたのは先ほどでてきた対暗部暗部組織”更識”の従者である”布仏本音”である

なぜ俺が名前や立場を知っているかはここでは割愛しよう

にしてもそうか〜織斑先生がこのクラスの担任か〜へ〜

「マジで?」

「マジなのだよ〜」

「そうか・・・この世界に神はいない」

「どうしたの〜なっちゃん?」

いや、だってさあのブリュンヒルデだよ?めっちゃめんどそうじゃん!!見るからにルールにうるさそうだしめんどそうだし厳しそうだしめんどそうだし

「なんだ?不満か?」

「無満ではないですよ。ただ面倒くなりそうで鬱だなと思っただけです」

「ほう。安心しろ、私は厳しいからな」

「・・・だから面倒なんじゃないですか」

俺がorzな体勢でおつになっていると横から誰かが頭をなでてきた

「だいじょうぶだよなっちゃん。わたしもいるから」

「それが何の解決になるんだ？」

「え〜とね〜、わかんない！」

「はあ・・・もういいよ」

俺達がこんな感じのやり取りをしているのを周囲は興味深そうに観察している。そんなに珍しがるようなものだろうか？女子の考えはよくわからん

「さて、話はまとまったな。次はお前が自己紹介しろ」

「なぜです？まだ俺の番ではないはずでは？」

「きにするな。というか周りがきにしすぎていいかげん収集がつかなくなりそうだから・・・」

「はあ・・・まあ確かにこの状況は少々まずいですね」

今の状況を簡単に説明すると俺、いや俺と織斑先生そして本音に対する周囲の興味や嫉妬の視線がきついです！！なんで俺に対して嫉妬の視線も飛んでくるのかはわからないが今にも爆発しそうな状況でした

なので俺は速やかに自己紹介することにした

「霧生 凧です。偶然ISを動かせたのでこの学園に条件付で入学しました。ちなみにその本音とは幼馴染です。好きなことは知識を得ることに研究、嫌いなことは面倒なことです。まあ、これからいろいろあると思いますが偶然にも一緒のクラスになった以上仲良くいきましよう。1年間よろしくお願いします」

俺はそういつて頭を下げた。まあ、こんな感じでいいだろう。

「さてまだ自己紹介が終わっていないようだがもうそろそろ時間がないので後のものは適当にやっておけ。ちなみに私がこのクラスの担任を務めることになった織斑千冬だ！君たち新人を15〜16の間に使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。出来ない者には、出来るまで指導してやる。逆らってもいいが私の言うことは聞け、よかったら返事をしろよくなくても返事をしろ、私の言うことには返事をしろ、いいな？？」

・・・何というまるで軍隊のような言葉であったがそこには消して見捨てないという確固たる自信を持っているのを感じさせる挨拶をした

これが世界最強の威厳というやつなのだろうか？

と考えていた俺の思考は急にさえぎられた

「きゃあああああ！！千冬様、本物の千冬様よ！！」

「ずっとファンでした！！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！！北九州から！！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！！」

「私、お姉様のためなら死ねます！！」

・・・なんとか予想外だった。世界の頂点に教えてもらえるのは確かに光栄なことだがこれはいくらなんでも予想外だった。後最後のやつ、さすがに死ぬのはどうかと思うぞ。もっと命は大事にしないさい

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

織斑先生はあきれたように頭を抑えてつぶやくが彼女達にはさらに火をつけたらしく

「きゃあああああ！！お姉様！！もっと叱って！！罵って！！」

「でも時には優しくして！！」

「そしてつけあがらないように躡をしてええええええ！！」

さらにヒートアップしていた・・・なんかここまでくると何を言っても無駄なような気がする。織斑先生も無駄だと悟ってのか頭を抑えているがそれ以上は何もいわなかった

そんな感じで初日のH Rは終わった

のだがその後俺が周りから質問攻めにされたり視線で殺されそうになったりしたのを追記しておこう

はあ、これから面倒になりそうだな・・・

いきなりの面倒ごと（前書き）

さて第二話ですがやはり文章などを評価してくれる人がいるのはうれしいですね

今後ともがんばるためにはみなさんの応援が必要です

今後ともよろしくです

ではどうぞ

いきなりの面倒ごと

IS学園とはその名の通りISについて学ぶ場所だ

それゆえに倍率も高く授業のレベルもかなり高い

何が言いたいのかというと、入学式の日も授業があるのだ・・・

「・・・であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ・・・」

教壇に立って、教科書片手に授業を行っているのは山田先生

さっきのHRではかなりおどとした様子だったが授業になるとその様子は消えていた

というかなぜに副担任が授業してるんだ？ちなみに担任は脇で腕を組んで授業を見ている

たしか副担任の仕事は担任の補佐と担任不在時の代役のはずなのだが・・・

さて、それはおいておくとしてさっきも言った通りこの学園はレベルが高い

つまるところこの学園に入れるやつはみんなそれなりにできるやつだということになる

そのはずなんだが・・・

もう一人の男である一夏の方を見てみると、教科書と山田先生を交互に見ては、ぱらぱらと教科書を行ったり来たりさせている

さっきから授業には関係のないページを開いては頭をひねっている
なにをやっているんだ？

ちなみに俺はもともとが蔵技研所属なためISについて知識として
コアに関して以外は完璧にしたある

なので織斑の挙動不審な動きをなんとなく眺めていた

「織斑くん、何かわからないところがありますか？？」

するとそんな織斑の様子に気がついた山田先生が一夏に対して話し
掛けた

織斑ははっと顔を上げてまたなにやら戸惑っている

「あ、えっと・・・」

「分からないことがあったら何でも聞いてください。なんせ私は先
生ですから！！」

なぜか先生ですからを強調している山田先生
本人はそんなつもりはないんだろうがそのしぐさは正直はんそくで
ある

なぜならそのしぐさをするとはちきれんばかりの胸が更に強調され
るからである

男である以上そこに目が言ってしまうのは仕方のないことであるだ

ろう

と、つい柄にもなく考えていると突如俺の頭にシャーペンが飛来した
飛んできた方向は俺の左隣
つまりは本音からであつた

なんだと本音のほうを見るとそこには相変わらずのほほんとした笑
みでこちらを見ている本音がいた

ただいつものほほんとした笑みとは違い何か恐ろしさを持った笑
みだった

さすがは対暗部暗部組織の従者といったところだろう

「・・・せ、先生!」

「はい、織斑くん!!」

織斑はついに意を決したように山田先生に話しかけ山田先生はどん
とこいといった感じで返事をした

「ほとんど全部分かりません!!」

「え・・・??? ぜ、全部、ですか・・・???」

・・・おいおいそりゃないだろ

さすがに山田先生も予想の斜め上の返事に戸惑っている

「え、えっと・・・、織斑くん以外で、今の段階でわからないって
いう人はどれくらいいますか??」

山田先生はクラスに対して確認を取る
もしみんなわからないのだとしたらすさまじく問題であるからである
しかし誰も手を上げない

「・・・」

それはそうだろう

ここにいるやつらはみなこの程度は理解できなければいけないのだから

「おい風、お前はわかるのか？」

織斑が俺に聞いてくる

その目は「お前もわからないよな？」といていた

「当たり前だろう。この程度理解できないのならここにいないさ」

織斑はorzの体勢をとった

授業中なのだが・・・

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？？」

そんな状況の中さっきまで腕を組んで授業をみていた織斑先生が確認をとる

その表情はまさかよんでいないのか？という顔をしていた

まあ、でもさすがに読んでないなんてことは・・・

「古い電話帳と間違えて捨てました」

・・・あったよ。てかどうすれば電話帳と間違えるんだよ
たしかに電話帳サイズの厚みはあったが普通表紙みて確認するだろ・
・

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者!!」

織斑先生の雷が織斑に落ちる

若干哀れではあるがこれは確実に織斑が悪い

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「あの厚さを一週間で!?!無理だって!」

「やれと言っている」

「・・・はい。やります」

そんなやり取りもありつつ一時間目の授業は織斑の頭出席簿が落ちた以外は平和に終わった

ちなみに俺はその後ずっと本を読んできました

その後の休み時間に織斑がやってきて織斑のことを一夏と呼ぶことになったりイギリスの代表候補生、たしかオルコットとか言うのが話しかけてきたりそこでまた一夏の馬鹿さ加減が明らかになったり

といろいろとあったが俺には関係ないので割愛させてもらう

あ、オルコットが一夏に話しかけてきた瞬間俺はめんどそうなので逃げましたがなにか？

休み時間の終わりに戻ってみると一夏が「逃げたな」的な視線を送ってきたがスルーしておいた

さて時間はすすみ居今は二時間目

HRの時間を入れるとさっきのが二時間目で今が三時間目となる

教壇にたっているのは織斑先生

そのせいかさっきまでの時間よりもクラス内が真剣さで満ちている

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

と、授業を始めようとしたがそこで一度織斑先生は止めた

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

と切り出した

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・つまりは、まあ、クラス長だな」

どうやらこの学園ではクラスの代表を決めなければならないらしく

また、それなりに責任も伴うらしい

「ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はない・・・が、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいるように」

ふむ・・・めんどそうだな

できればやりたくはないがここはIS学園

つまりは俺と一夏を除けばあとは生徒全員が女子

話題に事欠かない俺たちが推薦される可能性は非常に高い

まあ、俺はやらないけどね時間なくなるしめんどくさいし疲れるしめんどくさいし

「それで誰か立候補者はいないか?? 推薦でも構わないぞ??」

「はいっ。織斑くんを推薦します!!」

案の定一夏が推薦される

「私もそれがいいと思います!!」

「私もー!!」

最初の発言に重ねるように一夏を代表にという意見が次々に上がる

「お、俺!？」

「では候補者は織斑一夏・・・ほかにはいないか?もう一度言うが、自他推薦は問わないぞ。それと織斑。いい加減に席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか?？」

「私はなっちゃんを推薦します」

「なぜに?」

一夏に押し付けられそうだった矢先俺の横から俺を推薦する意見が上がる

推薦したのはもちろん本音

なぜにという視線を向けると少し申し訳なさそうにこっちをみた

おそらくはあいつの差し金か

最近まったく連絡取ってないから怒ってるんだろう

「はいはい、私も霧生くんに一票いれます」

「私も霧生くんを推薦します」

またしても俺を推薦する声があがる

「候補者は霧生風と織斑一夏。他にいなければこれで締め切るぞ」

織斑先生がそういうと一人の女子が机をたたきながら立ち上がった

「待ってください!納得がいきませんわ!」

立ち上がったのはさっき一夏に突っかかって言っていたイギリスの代表候補生のオルコットであった

「待ってください！！そのような選出は認められません！！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

・・・

「實力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！！わたくしはこのような島国までIS技術な修練に来てるのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

・・・

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！！ISの知識もろくにない極東のサルや、ISも使えないくせに玩具でISに対抗しようとしている極東のサルがクラスの代表になるなんてありえませんか！！」

・・・うぜえよこいつ

なんかマジでイラついてきた

いつもは切れたりしない俺だが今回は久々に切れそうだ

だが、落ち着け冷静になれ

ここでほうっておけば俺は代表にならずにすむ

面倒ごとに巻き込まれない

・・・よし落ち着いた

このままこいつをおだてて押し付ける方向でいこう

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

なんか一夏が切れた

「あっ、あっ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「侮辱もなにも、先に馬鹿にしたのはそっちの方だ。違うか？」

・・・あれ？

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

おかしいな・・・

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い、いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そうですか？ 何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね！」

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

「お、織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

クラス全体が笑う

「なに言ってるんだよ、俺と風はIS使えるんだぜ？ やってみなきゃわかんないだろ？」

なあ？ と言いたげな視線を送ってくる織斑

なんかよりいっそう面倒な事態になってね？

「よし、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。まずは織斑とオルコットで戦い勝った方と霧生が戦う。それでいいな」

有無を言わせない織斑先生の言葉でしめられた

あれ？俺一言もしゃべってないのになんか面倒ごとに巻き込まれてない？

いきなりの面倒ごと（後書き）

どうでしたか？

文章の文字数は少しだけ前回より多いですがそれでもまだ少し少ないですね？

今後も精進していきます！！

初日の終了と再会（前書き）

こんな駄文を読んでもくれる方がいるなんて感激の極みです

今後ともがんばっていきます

ぜひ作者のために感想などをくれるとうれしいです

ではどうぞ

初日の終了と再会

「ようやく終わった・・・」

ようやくI S学園初日の授業のすべて終了したのだ

背伸びをするそばきばきという音がした

一夏のほうをみると机に突っ伏している

まあ一日中最前列という位置で女子からの視線をもらに受けていたのだから仕方ないか

それに自業自得とはいえ織斑先生に何回か出席簿アタックをくらっていたからなく

てかあれぜったい出席簿でだせる音じゃない気がするんだが・・・

俺がそんな感じのことを考えているとさっきまで机に突っ伏していた一夏が話しかけてきた

「ようやく一日終わったな」

「ああ、お互いお疲れ様だな」

「ああ、にしてもこれは肉体的な疲れってよりも精神的な疲れが大きいような気がするよ」

「それについては激しく同意する」

はあと男子二人今日のお互いの状況を話しながらお互い励ましあっているときさっき出て行った山田先生が戻ってきた

ちなみに今は最後の授業が終了してから2時間ほどたっているので

さつきという表現はおかしいのだが山田先生はさつきまで今日の授業で一夏の知識に相当な問題を感じたようだ

「先生ですから!!」

とって放課後一夏にISについて補修したいのだ
ではなぜ余裕な俺もここにいいのかというところ

「山田君はその、なんというか、少々想像が過ぎるというかなんと
いうか・・・とにかく危ない状況になることがある。お前だけが頼
りだ!」

と織斑先生に言われたため言い方は悪いが山田先生の監視のために
一緒に残っていたのである

まあ今日の授業を見る限りこの二人だけにすると補修どころではな
くなりそうだしな

無難な判断であるといえるだろう

さて、その補修が先ほど終了したわけだが当然入学前の参考書を捨
ててしまい読んでいない一夏が簡単に理解できるはずもなく結果的
に今日一日のとどめを山田先生にさされた形になった

この後日一夏にはさらに物理的などどめが下される斧だがここでは
割愛しよう

「ああよかった、まだいました」

と、先ほど出て行った山田先生がすこしいそいで戻ってきて言った

「お二人の部屋割が決まりましたよ」

「え?？俺は確か一週間は自宅通学って言われてたんですけど?？」

部屋割りが決まったという言葉に疑問を返す一夏

普通に考えればわかるだろ・・・

と若干あきれていると山田先生が

「ええ、本当はその予定だったんですがお二人の場合は特別なケースでしたので何とか部屋を用意したんです」

「?？？なんで俺らは特別なんですか?？」

はあ・・・こいつ自分の立場わかってないな

「一夏、俺らがい今言うのはどこだ?」

「え?？IS学園だろ?」

「そうだつまり俺らはISを動かせる。そして俺らは男。これがどういう意味を持つのかわかるだろ?」

「?？」

本当にわからないといった顔そする織斑

山田先生も若干苦笑いをしている

「つまり俺らは研究者やほかの男たちから狙われる危険があるんだよ。研究者にとってはいいモルモットだから俺らは」

「ああ、でもそんなことおこらないだろう？」

「この世界に絶対なんてない。可能性がある以上ここにおいておくのが一番なのさ。納得しなくても理解はしておけよ」

俺は最後にそう一夏に告げる

一夏はわかったようなわからないような表情をしていた

「それで山田先生、俺らは相部屋ですか？」

そろそろ部屋に帰ろうと思い山田先生にきく

「いえ、部屋割りの都合上お二人は別々でそれぞれ女生徒との相部屋になります」

少々気まずげにいう山田先生

「そうですか・・・まあいいですなるようになるでしょう。で、部屋番号は？」

「えーと織斑君は1025で霧生君は1034です」

そういいながら鍵を渡す山田先生

「それとこの学園意は大浴場があるんですけどお二人はまだ使えません」

「えっ? 何ですか？」

おいおい一夏そんなこともわからんのか？

「お前は女生徒と一緒に風呂に入りたいのかばか者」

ばごん！！という出席簿が一夏の頭に落ちる音とともに織斑先生が現れた

てか威力高いなうだって一夏伸びてるし

「お、織斑君！？大丈夫ですか！？」

「霧生やつのは気にせず部屋に行け。荷物は今日お前が学園に送ったものを運んでおいた。」

「そうですね、そうさせてもらいます」

俺はそういうと部屋にむかって歩き出した

「1034 ここだな」

こんにちは

一応鍵を持っているが同居人が何をしているかわからない以上礼儀としてノックをして様子を見ることにした

「？どうぞ」

中から返事が返ってきた

「失礼します」

俺はそういいながら部屋に入った

部屋に入るとそこにはベッドが3つならんでいてそのうちの2つに人がいた

おそらくは同居人だろう

「あれ？ なっちゃんだ〜どうしたの〜？」

「え？ 凧!？」

「何でお前らがここに？」

部屋のベッドにいた同居人は俺の幼馴染

同じクラスで隣の席の布仏本音と更識簪の二人だった

俺はむかし両親が自殺してから更識家に少しの間やつかいになっていた

本音は幼稚園のころからの知り合いで幼馴染

簪はお世話になったときに知り合い仲良くなったことらも幼馴染である

「それはここがわたしとかんちゃんのへやだからだよ」

俺の先ほどの問いに答える本音

簪はあまりの自体に呆然としている

「え？ え!？ 凧!？ なんで、ここに!？」

簪はようやくわれに返るといつもの彼女からは想像もできないぐら
いおおきな声で言う

「俺も今日からここで生活するんだよ」

「そう、なんだ・・・」

「なっちゃんと一緒か」

「ごめんな。いやかもしれん」「そんなことない（よく）！」「そ
うか」

俺が言い終わる前に言葉をさえぎる二人

いくら知った中とはいえ同居はいやだろうと思ったが二人は若干ほ
ほを染めながら俺の言葉を否定する

「それにしても・・・なんで連絡くれなかったの？」

簪が少し怒ったふうに聞いてくる

「忙しかったからってのもあるけど俺も必死だったから。正直に言
うと周り気にする余裕なかった。ごめん・・・」

俺が倉技研に配属してからは本当に忙しかった
知識と知っていて理解していても自分で考え作るというのは勝手が
ちがった

いくら俺が俗に言う天才でもその日々はまさに多忙だった
だから連絡したりすることに気を配れなかった

「・・・そう、なんだ」

「ごめん・・・」

「いいよ、もう。また・・・会えたから」

「ありがとう。それと俺もうひとつ謝らないといけないことがあるんだ」

「なに・・・？」

「簪の専用機開発を倉技研でで請け負ったのは知ってるだろ？」

「うん」

「その専用機なんだけど・・・俺にしか使えなくなった」

「・・・どういこと？」

「俺がISを動かしたのは知ってるだ？そのとき起させたのがその簪の専用機だったんだ。俺が起動させてから何度コアを初期化しようとしても受け付けなくて今俺の専用機のコアとして使われてる。だから今簪の専用機は何もできてないだ・・・」

「そう・・・べつに、いいよ」

「え？」

「別にいいよ・・・私は、風とまたこうしてあえるだけで・・・うれ

しいから」

「ごめん。そしてありがとう」

「うん・・・」

「それで専用機だけど」

「うん」

「俺が学園側から譲渡された打鉄のコアを使って俺がここ（学園）で作ることになった」

「・・・いいの？」

簪はためらいがちに聞いてくる

簪は昔から我慢ばかりしているからな

「いいもなにもともとうちで作ることになってたからね。それを俺のせいでコアまでなくしたんだから俺が一人で作るよ」

俺がそういうと簪は首を横に振りながらいった

「一人、じゃないよ・・・私も手伝う」

そう申し出てきた

「でもこれは俺の責任だし」

「いいの。手伝わせて・・・」

声は小さいが俺はそこに確かな簪の自己主張を感じた
これを拒むのは失礼だろう

「わかった。俺たちで最高のものを作ろう！」

「うん・・・！」

「わたしのこと忘れてないかな・・・」

「「あ・・・」」

「やっぱり忘れてたんだ・・・」

こうして今日

IS学園入学初日は終わった

今日一日で相当疲れたな・・・明日からの生活が思われるよ・・・

はあ・・・

追記 その夜の夕食は久しぶりに簪と本音、それといつの間にか現れた楯無と虚と俺の5人で夕食しました

外出許可申請？そんなものするわけないじゃないですか

そこらへんは楯無に何とかしてもらいました

仮にも生徒会長みたいだしそこらへんは融通が利くようだった

まあ、そのとき虚が頭を痛めていたことから手続きなどは虚に丸投げしたんだろうが・・・

初日の終了と再会（後書き）

次の投稿は1週間後です

クラス代表決定戦（前書き）

今回は風君の戦闘シーンはありません

次話へのつなぎです

感想などなどよろしくお願いします

クラス代表決定戦

あのIS学園入学初日に俺に降って来た面倒ごとの日がやってきた
イギリスの代表候補生が宣戦布告してから1週間
その間俺は自分のISの整備開発を簪、本音と三人でして過ごした
一応完成してはいるので戦闘はできるがまだ完全に完成していない
ものがあつた

「エナジーウイング」

俺の機体に実装している次世代飛行ユニット
その名の通りエネルギーで翼を形成して今現存しているどの技術よりも飛行能力を高めることができる
エネルギーによる形成された翼なのでそれそのもので防御することもできる

と、ここまでならただ便利な次世代の技術なのだがこれは問題を抱えていた

そう、この技術はエネルギーを翼の形に固定しなければならない
理論は出来上がっているのだがまだ完成はしていないのである
飛行ユニットが出来上がらなければ普通の戦闘はできない
なのでなんといしても完成さえなければならぬ

なので俺は簪たちに協力してもらった
楯無や虚も協力してくれるといったのだが生徒会所属の人間が肩入れするのはまずいということで辞退してもらった

1週間簪たちと整備質を借りきり作業をすすめ何とか固定化まではできるようになった

これでなんとか飛行はできる

だが、ここでまた問題が発生した

出力を上げられないのだ

出力を上げると形の固定化ができなくなり固定化されていたエネルギーが暴発し命の危険があるのだ

試験的に出力を上げたさいそれが起こり俺は危うく死に掛けた

なので今の俺の機体は最大出力を出すことができずベストな状態には程遠かった

まあ、それでも既存の第3世代型には遅れをとらないだろうが・・・

さて今俺はアリーナのモニターで一夏とオルコットの試合を見ている
今回はクラス代表決定戦という名目での一夏とオルコットの決闘の
ようなものなので俺は完全にとぼちりだろう
なのでまずは二人で試合をしてその勝者と俺が戦うという方式をと
っている

なので俺は今モニターで試合を見ているのである

試合は開始のブザーとともにオルコットが一夏に向けて射撃をした
銃の名前はスターライトというらしい

当然初心者の一夏がかわせるはずもなく被弾しいきなりシールドエネルギーを削られる

それからお互い攻防、いや一夏は交わしていただけたがを繰り返して30分ほどが経過した

一夏はシールドエネルギーを三分の一くらいまで削られいっばいいっぱいなに対してオルコットはまだ無傷だった

まあ相手が代表候補生というのもあるが何より機体の武装相性が圧倒的に悪い

オルコットの「ブルー・ティアーズ」は巨大な狙撃用レーザーライフル「スターライトmk3」と、機体名と同名の自立誘導兵器通称^{ビット}4基による全方向からの遠距離射撃を可能にしているのに対し、一夏の「白式」の白式はなんと近接ブレードが一本だけ

これで30分も持つのはさすがとしか言いようがない
アリーナ内も一方的な試合内容にあきれの空気が漂っていた

俺に言わせればあのビットには問題があるように思える
なによりオルコットのが直接命令を出しているため攻撃パターンが単調になりさらにはビットを操作している間は一度もスターライトを打っていない

おそらくはビットの制御に手一杯で射撃ができないのだろう
そこをつけば近接ブレードしかない一夏でも何とか勝機があると思うのだが一夏が気づくかどうか問題だな・・・

なんせあいつはこの1週間ずっと剣道をやっていたと聞く
確かにISはあくまでもスーツなので悪くはない選択だが初心者が扱い方も知らないのに動きを学んでも意味がない

さて、あいつは気づくかね？

俺がそんならちもないことを考えているとモニター内で状況が変わった

一夏が近接ブレードでビットを切り裂いたのである

先ほどまでかわすので精一杯にみえた一夏だが今はビットの攻撃を完璧によけ次々に切り裂いていく

どうやら癖に気がついたようだ

オルコットの操るビットは必ず人の死角となる場所からしか攻撃してこない

つまり後ろや真下にしかこないのだ
それに気づいたらしい

一夏の動きは先ほどまでとは打って変わりよくなっていた

ビットをすべて破壊しそのままオルコットに向かって突っ込んでいく
だが次の瞬間一夏は爆炎に包まれた

どうやらオルコットがミサイルを二機隠しもっていたらしい
直撃を受ければあのシールドエネルギーでは終了である
オルコットも自分の勝利を確信しているようだった

だがまだ試合は終わっていないかった

爆炎の中から一夏は出てきた

出てきた一夏のまっていた機体はさっきまでとは違っていた

なにより気になったのは先ほどまでもっていた近接ブレードである
先ほどまでは普通のものとなんら変わらない形をしていたそれは今はブリュンヒルデが使用していた近接特化ブレード「雪片」に酷似していた

・・・もしあれが本当に「雪片」なのでしたらおそろくあれの能力は

「バリア無効化攻撃」

相手のバリアなどを無効化し攻撃することができるまさに一撃必殺の能力

ビーム兵器に対して絶対的な力を発揮するそれはまさしくオルコットの天敵になるだろう

・・・ただ本当にそうなら今の一夏が使えば

そこでブザーが鳴る

「試合終了、勝者、セシリアオルコット！」

負けるぞ？

「なんで俺負けたんだ？」

俺が一夏のピットに行くとな案の上一夏は自分が負けた理由がわからないようだった

確かにあの時一夏の攻撃はオルコットを捕らえいた
確かに決まったはずの一撃

しかし現実には負けたのは一夏だった

俺の予想では・・・

「それはバリア無効化攻撃を使ったからだ」

織斑先生が一夏に解説したい

一夏が負けた理由は俺が考えていた通りバリア無効化攻撃を使用したためだった

あれは確かに強力な能力だが自身のシールドエネルギーを攻撃に転用しているので相手が何もせずとも自分からシールドエネルギーをけずってしまうのだ

「いうならばその白式は欠陥機だ」

「え！？ 欠陥機！？」

自身の機体が欠陥機だという織斑先生にたいして反応する一夏

「いや、これは言い方が悪いな。そもそもISは完成などしていないのだからな。お前の白式は普通のISに比べてはるかに燃費が悪いということだ」

「まじかよ・・・」

織斑先生の説明に肩を落とす一夏

でも実際問題一夏の「白式」の能力は高い

おそらくは俺の”あれ”をも貫通する能力を持っているのだからな

「まあ、そもそもお前は初心者だ。これからはISを何度も展開し

なれていくんだな」

そう締めくくる織斑先生

その後山田先生からあほみたいな厚さのマニュアルを受け取っていたなんでも校内でのISの展開などに関するルールブックのようなものらしい

「さて、次は霧生の番だな。準備はできているのか？」

俺にそう聞いてくる織斑先生

「ええ、一応はできてますよ」

「なんだ、うかない顔をしているが？」

「そりゃそうですよ。とぼっちりのせいでまだ完全にはできてないこいつ（鋼）を使わなきゃいけないんですから」

俺はそう返した

「まあ、データをとるいい機会だろう？」

にやりという表情で聞いてくる織斑先生
確かにそうなのだが面倒なことに変わりはない

「はあ・・・ではいつてきますよ。おいで、鋼」

俺がそういうと首から提げていた銀のネックレスが光ISが展開される

全体が黒く間接の部分までも装甲で覆われ顔にもヘッドギアのようなものをつけている

間接の部分にはぶい銀の色をしていてどこか鎧を思わせる

「それがお前の・・・」

「はい。俺の専用機 鋼 です」

俺はそういうとアリーナに出て行った

絶対の防御力（前書き）

今回はいよいよ風の戦闘シーンです

戦闘シーンの描写は短い上に下手ですがどうかそこは温かい目で見てください

絶対の防御力

俺が織斑先生に返事をしてアリーナに出るとそこには先ほどの戦闘で一夏を下したオルコットが空中で待機していた

俺がアリーナに現れてのを確認したオルコットはどこか申し訳なさそうな感じで俺に話しかけてきた

「お待ちしておりましたわ、霧生さん」

教室で男子を見下して一夏に喧嘩を吹っかけた人物と同一人物とは思えないほど穏やかな口調でその態度にも俺を見下すような様子は見受けられなかった

しいて言うなら「戸惑い」だろうか？そんな感情が見て取れた

「どうかしましたか？」

俺が不思議そうに見ているのに気づいたのかオルコットは俺に話しかけてくる

「いや、ずいぶんと雰囲気が違うからな。驚いた」

「それは・・・すみませんでした」

オルコットは素直に謝罪する
本当に何があった？

「いや、俺自体は特に何もいわれたりしていないから別にいい。それはそうと何かあったのか？」

俺は気になっていることをきいてみることにした

まあ、俺の予想では一夏との間に何かあったとしか考えられないが

「わたくしは先ほど試合で男の”強さ”というのを見ました。世の中の男のすべてが女性に対してこびへつらう存在ではないことを実感させられましたわ」

「そうか。やはり一夏だったか・・・」

俺は若干あきれを含んだ口調で言う

俺は一夏とそこまで親しいわけではないがこの1週間あいつを見ていた限りでは一夏は天然のフラグメーカーの才能を持っているのだろう

あいつは無自覚に人に優しくするからな・・・

それでおちる女子は多いようだ

いつか後ろから刺されてNICE BORTになればいいが・

「ええ・・・／／／／／」

オルコットの様子を見る限り間違いなくおちているだろう
はあ・・・

誰とどういう関係になろうとも俺はどうでもいいが少なくとも俺にとばかりで面倒ごとが降りかかるのだけは勘弁してほしいな
具体的にいえば織斑先生の愚痴とか愚痴とか愚痴だ

「で、どうする。俺とは試合するのか？」

俺はこのままでは埒が明かなくなりそうなので確認することにした
このままだといつまでたっても状況は変わらないからな・・・

「ええ、これはクラス代表を決定する試合ですので」

俺の問いにオルコットはそう答える

どうやら試合はするらしい

ただこのまま試合しても俺にメリットないんだがな

だってもし俺が勝ったら俺とオルコットは1勝1敗で並んでしまう
もしそうなって場合さらに面倒になる可能性が高い

俺が負けてもなんかあとからそれをネタにあの生徒会長とか生徒会長
とか生徒会長にいじられそうなので負けるわけにも行かない

俺どっちに転んでも面倒ごとに首突っ込むよな・・・

はあ・・・

まあいい

今は試合に集中するでしょう

「じゃ早速はじめるとするか」

「そうですわね」

「ところで、先ほどから気になっていたのですが・・・あなたのI
Sは全身装甲なんですか？」

俺のISについて気になったのだろう

俺のIS 鋼 は広域殲滅と絶対の防御、そして指揮能力の3点を

徹底的に追及した機体である

そのため絶対防御ではなく全身を特殊な装甲で覆っている

そのため機動力は全機体の中で最低の部類に入るだろう

それを緩和するためのエナジーウイングなのだが・・・

『話はまとまったようだな。ではこれより霧生風対セシリア・オルコットの試合を行う。』

俺たちの話がまとまったのをみて、個人的にはいろいろと考えているのだが、織斑先生が告げ直後試合開始のブザーが鳴った

「では、行かせてもらいますわ！」

オルコットは試合が始まると一夏のときと同じようにスターライトを打ってきた

当然いきなりの奇襲なのでよけられないだろうと思っていたオルコットだがその予想は外れた

「じゃ～ね～」

スターライトが打たれたその瞬間すでに風はその場にはいなかった

「!?!?どこに!?!?」

すぐさまISのハイパーセンサーで探すが風の姿はどこにもない

「消えた!？」

「風のやつどこにいったんだよ!？」

「・・・・」

ピットから試合をモニターで見ていた一夏たちは突如消えた風に驚きの声を上げる

ちなみに今の発言は上から順に箒、一夏、織斑先生である

山田先生は驚いて声も出せずにいた

それからさらに10分が経過したがいまだに風の姿は捕捉できずにいた

試合開始のブザーが鳴るまでは確かに空中、それもオルコットの視界にいたはずの風

しかし開始と同時に姿を消し今の今まで捕捉できずにいる
これは異常な事態だった

「ああ、もう!!どこにいったんですの!？」

オルコットはいらだっていた
それもそのはず

試合開始と同時に放った射撃をかわされたのならまだしも捕捉すら

できなくなったのだから

だがそんな状況は突如一変した

いきなりオルコットの真下から赤黒い極太のビームが発射されたのだ

突然の事態に対応できずオルコットはそのままアリーナのシールドに一番上まで吹きとばされた

「つうう・・これはいったい？」

絶対防御では防ぎきれなかった衝撃を受けたオルコットは自身に何が起こったのかを確かめようとさっきまで自分がいた真下をみた

「なっ！」

そこには試合開始同時に姿をけしいまのいままで捕捉できなかった
風がいた

凧は試合開始と同時に鋼に搭載されている機能の一つを使用していた

「ミラージュコロイド」

ありていに言えば周りのいろや景色に溶け込み自身の姿を見えなくする能力である

その鋼に使用されているそれはISのハイパーセンサーをもってしても探知できないため作業の時間が必要だった凧はすぐさまこの能力を使った

凧のしたかった作業

それは”絶対守護領域”の調整だった

アリーナに出た凧はすぐに鋼のエネルギーウイングの不調に気づいていた

やはりまだ未完成ゆえにこのまま飛行しているのは危険だったのだ
さすがに凧や簪ががんばったとはいえ、やはり1週間という時間では戦闘に耐えうるレベルまでの調整はできなかったのだ

するとどうなるのか

凧は空をとべないのである

相手が空中にいる以上自分も飛べなければ不利

さらには癖がわかったとはいえあの自立行動兵器はかなり厄介だった
ではどうするのか？

交わすのが困難ならば防げばいい

凧はそう考えたのである

この機体”鋼”には絶対の防御領域を展開する能力がある
しかしそんな便利なものがそう簡単に使えるはずはない

絶対守護領域を張るにはそのつど展開する範囲、時間などを逐一計算して展開する必要がある

そしてそれには戦闘する場所の環境データを打ち込む必要があった

いままでは屋外の制限されていない環境を想定して開発されていた
が今いるのはアリーナ

周りをシールドで囲まれ上にも下にも空間の制限がなされている

そのままではこの能力を使うことができなかったのだ

だから風は姿を消しそのままその環境データを入力していたのである

「大丈夫かい？」

風は自身の攻撃をうけて吹き飛んだオルコットに声をかける

声をかけられたオルコットは困惑した様子で風に答えた

「ええ、なんとか・・・それにしてもいままでどちらにいたんですの？」

当然の疑問をぶつけてくるオルコットに対して風は答える

「ずっとこのアリーナの地面にいたよ。さっききみに攻撃するまで俺はずっと同じ場所にいた」

「でも、ハイパーセンサーには何の反応も・・・!」

俺の答えに対して納得ができないのかさらに聞いてくる

「まあ、姿が見えなかったのはこいつの能力のひとつだ。ちなみに今まではこいつの能力の調整をしてたんだよ」

「

はあ・・・ところであなたは空を飛ばないんですの？」

疑問はとりあえずおいておいて俺が飛んでいないことに対しての疑問を口にした

「まあね。今こいつの飛行ユニットが不調というか未完成でね」

「・・・そんな状態で勝負になると？」

「別に飛べないから勝てないというわけではないさ。それに俺はこの状態で君に勝つために今まで姿を消していたんだよ？」

「・・・また姿を消して奇襲するおつもりですか？」

卑怯だと言いたげな表情で聞いてくる

「まさか、そのつもりならこうして姿を現したりはしないよ。ようやく調整が終わってね。これからが本番さ」

俺はこともなげに告げる

「そうですか。では私もここからは本気で参りますわ!!」

そういうとオルコットは自身の機体と同名の自立行動兵器を四機射出し俺を全方向から取り囲む

「くらいなさい!!」

ビッドからビームが俺に向けて発射される
タイミング的に交わしがない攻撃

しかし俺には効かなかった

「な!?!きていないんですの!?!」

驚きの声を上げるオルコット
アリーナ内も何が起こったのかわからないようだった

「これが俺の機体 鋼の最大の能力『絶対守護領域』」

「絶対守護領域?それは何ですか?」

オルコットが聞いてくるが俺はそれに答えるつもりはない

「教えないよ。今は試合中だ、あいての自分の手の内をさらすやつがどこにいる？」

「・・・そうでしたわね。その能力は私の攻撃を無効化するようにです。ですが!!」

そういうとオルコットはビットから再度ビームを放ち自身もスターライトを打つ

どうやらビットとの並行使用ができるようになったらしい

だがそんなオルcottの猛攻も風にはきかない

先ほどいていた『絶対守護領域』により完全に防がれいまだシルドエネルギーを減らせていなかった

「くっ！なんて硬さですの!？」

オルcottはエネルギーが切れたビットを戻しながらそういった

「それは光栄だね。でもいい加減疲れたから終わりにするよ」

「??.」

凧はそういうと自身の展開していた絶対守護領域けすと胸部にある発射腔を開いた

そこにはプリズム状に凝固させた特殊な液体金属が装填されていた

凧はそれをオルコットのいる方向ではなくアリーナの重心に向けて発射しさらにそれを追うように高威力のビームを胸部から発射した

液体金属に向けて発射されたビームはそのまま直撃

そして次の瞬間にはビームが乱反射しそのビームがすべてオルコットに向けて襲い掛かってきた

「くっ!?!? こんなことが!?!?」

何とかかわそうとするが何せ反射の範囲が尋常ではなく逃れることはできずにそのまま直撃

シールドエネルギーは0になった

『そこまで！勝者・・・霧生風！』

こうして今回の試合は俺の勝利となった

絶対の防御力（後書き）

感想などよろしくお願いします

主人公紹介（前書き）

今回は主人公の紹介です

ちなみに主人公の外見は急に変わることがあります

主人公紹介

主人公

霧生 凧 きりゆう なぎ

歳 15

クラス 1-1

目の色髪の色ともに黒の典型的な日本人

幼いころに両親が自殺しておりその後は更識家に厄介になっていた
そこで簪、本音と親しくなった。

倉技研に配属してからは家に帰らず倉技研に住んでいた
その間音信不通

非常に穏やかな性格で基本的に怒らない

幼少の頃より周りから疎まれてきたために本質に孤独がありそれが
世界を変えろという行動につながっている節がある

>i33840—4093<

専用機

名前 鋼

>i33834—4093<

凧が開発した次世代型ISで凧の心の移し身とも言える存在
もともと「打鉄式」で簪の専用機の予定だったが凧が起動して

しまったため風の専用機になる

その後風による改良が加えられ今の”鋼”になった

全体が黒で間接の部分が銀色の全身装甲

第三世代のイメージインターフェースの応用による思考トレースシステムを搭載する

絶対守護領域の展開範囲計算、拡散構造相転移砲の反射角計算などを自分でやらなければならないため、優れた状況判断力と演算処理力が重視となる機体

待機状態は銀のネックレス

武装

長距離高エネルギー砲「ハドロン砲」

両肩にそれぞれ一機ずつ砲門をもつ高威力のエネルギー砲

その名のとおりハドロンをつかったものであり長距離の敵であっても問答無用で撃墜する

「拡散構造相転移砲」

胸に搭載されたプリズム状に凝固させた特殊な液体金属を追うように高威力のビームを発射することで、広範囲にビームを乱反射させ長距離かつ広範囲の標的を一度に殲滅する兵器・拡散構造相転移砲が搭載されており、攻撃力・防御力に優れた最高クラスのスペックを獲得している。なお、拡散構造相転移砲は液体金属を用いない一点集中砲撃も可能

レールガン「クスイファイアス」

両サイドスカートに付けられた本機唯一の実弾装備

威力はほかのものに劣るが弾速が早く威力も高い

次世代試験飛行ユニット「エナジーウイング」

この機体の最大の目玉

エネルギーを使ってスラスターを動かし飛行する今までの常識を覆すもの

エネルギーそのものを羽の形に固定することで従来のものとは比べ物にならない安定性と飛行速度を誇る

また、それ自体非常に硬く自機にまとわせて防御することもできる
いまはまだ未完成であるが完成すればウイングそのものからエネルギー弾を射出することも可能になる予定

「絶対守護領域」

全方位エネルギーシールド・絶対守護領域を機体周囲に展開し、全方位からの一斉射撃や至近距離からの自機の拡散構造相転移砲をうけてもびくともしない絶対の壁

「マルチロックオンシステム」

試験的に組み込まれたシステム

本機の全武装を同時に使用し広範囲の目標を一度に狙い打つ

それぞれの目標にたいして起動予測などをしていないといけないため扱いが難しいシステム

主人公紹介（後書き）

どうでしょうか？

- ・ 兵器を書いたことがないので鋼は完全にお絵かきになっています・

できれば感想がほしいです

代表決定と新たな専用機（前書き）

今回は若干いつものに比べて短いです

いつも短い？すみません・・・

ではどうぞ

代表決定と新たな専用機

代表決定戦の次の日のHR

クラス代表の名が山田先生の口から発表された

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がり
でいい感じですね！」

そう、俺のクラスの代表は一夏に決定したのだ

試合の結果は一夏が一敗でオルコットが一勝一敗、俺が一勝という
結果だった

ここで分かるように一夏はクラス代表になる要素はない
だが一夏が代表に選ばれたのには理由があり・・・

「先生 質問です」

一夏が手をあげて山田先生に質問する

「俺は昨日の試合に負けたのになんで俺がクラス代表になっているん
でしょうか？」

「それは――」

山田先生が説明しようとしたのを遮るようにオルコットが説明しだす

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

なんとも偉そうにいうオルコット
だがオルコットの説明はまだ続き

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから！」

なんとも上からなご意見である

まあ、たしかに試合は一夏の負けだったが勝負は一夏の勝ちだったといえるだろう

あのときの一夏の最後の一撃は確実にオルコットをとらえていて、当たれば確実に一夏の勝ちだった

結果は一夏の自滅だったが本人は勝った気がしなかったのだろう

まあ、それだけが理由ではないようだが・・・

「それでまあ、わたくしも大人げないまねをしてしまったと反省しまして・・・”一夏さん”にクラス代表をお譲りすることになりました。やはりIS操縦者には実戦がなよりの糧。クラス代表ともなれば戦いにはことかきませんもの」

と、なんともそれらしい理由を並べてはいるものの本心は訓練としようして一夏といわれるからだろう

だってさっきの言葉の中で”一夏さん”と名前で呼んでいたからな

「オルコット」セシリアとお呼びくださいですわ」セシリアのほうはわかったけど風はどうなんだ？お前も推薦されてたしセシリアに勝ってるだろう？」

まあそう聞いてくるわな

「まあそうなんだがな。残念なことに俺の機体はまだ未完成でな、無理して使ってみたがもしそれで壊れたら元も子もないだろ？いつ完成するかもわからないから俺が代表になるのは無理なんだよ」

そう

俺の機体 鋼 は昨日の試合で確認したようにエナジーウイングの調整が完了していない

それに武装もまだ未完成で昨日オルコットに打ったビームも威力が足りなかったし先制につかったハドロン砲もエネルギー変換効率が悪く未完成である

つまるところ実戦投入はできないのである

本音を言えばめんどくさいというのと簪の機体の開発で忙しいというのもあるが・・・

「まあ、がんばれや一夏。俺は応援してるよ」

俺はそういつて会話を終わらせた

なんかその後オルコットと篠ノ乃がもめて織斑先生にありがたい出席簿アタックを受けていたようだが気にしないことにした

だって関係ないし

IS学園整備課

今そこには霧生風、更織簪、布仏本音の三人がいた
ちなみに時間は午前の授業がやっているであろう10時である
早い話がこの三人は先ほどのHR（簪は別のクラスである）の後そのままここにきているのである

つまりは授業をさぼっている

「本音・・・本当にいいの？今は織斑先生の時間なんじゃ・・・？」

「んーいいんじゃない？なつちゃんに手伝いだし」

少々気が弱そうに聞いた水色の髪の少女が簪
それに気の抜けたような返事を返した少女が本音である

「俺はここで授業中に何してても干渉しないっていう条件でここに来てからいいんだよ。それに簪と本音は手伝いつてことにしてるから大丈夫だよ」

そう答えた少年が霧生風である

「それにしても大丈夫なの・・・？ 鋼・・・」

「うーん。まあ大丈夫なんだけど武装がねーそれにえなじーウイングの調整もまだまだだし・・・」

「でも、武装は使ってたよ？」

「使えるには使えるけどエネルギーの変換効率がまだ完璧じゃなくてね。このままだとすぐにガス欠だよ」

「エナジーウイング・・・のほうは？」

「それもまだ実戦は無理だねー固定化できても安定しないから安全に飛べないんだ」

なんとも行き詰った状態である

「とりあえず今は鋼の方は置いておくとして先に簪の専用機のほうを調整しようと思う」

俺がそう切り出すと簪はおどろいたように聞き返す

「・・・え!?! もう・・・出来てるの?」

「完成はしてないけど8割ってとこだねー武装全体はできてるんだけどこっちもエナジーウイング使うから」

そう言いながら風は簪の専用機のデータを表示させる

「これが・・・私の専用機・・・」

「そう、現存するどの機体よりもスペックが高い俺の技術の集大成。
”紅蓮”だよ」

「紅蓮・・・」

「へー赤いんだーかっこいいよー」

それぞれが感想を述べる

「でも・・・こっちもエナジーウイングできてないんでしょ・・・」

当然の疑問を聞いてくる簪

それに凧は苦笑しながら答える

「まあね、でもこの機体に使ってる武装はどれもこれも新技術でね、実戦データがないと調整ができないんだよ」

「それじゃあ使えないんじゃないの？」

本音がもつともなことを聞いてくる

簪はじつとこっちを見ている

心なしかその視線は期待が見え隠れしている

「いや、そうでもないんだ。エナジーウイングの開発が間に合わない場合を考えて一機だけ飛行ユニットを作っておいたんだ」

そういうながら凧はまた新しいデータを表示する

「“飛翔滑走翼”これが俺の開発した新型の飛行ユニット。出力、機動力ともにエナジーウイングには遠く及ばないが現行のどのスラストより早いと思うよ」

凧が見せたデータに移っていたのは凧の開発した新型飛行ユニット
”飛翔滑走翼”

普通のスラスタとは違い見た目はエナジーウイングに近い形をしている

違うのはエネルギーを固定化する方法をとっていないこと

「これがあれば紅蓮は戦闘ができるよ」

「でも・・・それなら風の機体にも・・・それに初期化と最適化がまだ・・・」

「そうだよなっちゃんの機体も使えるんじゃない？」

「まあね〜でもエナジーウイングを使わないと完全にできないし、あ、それは紅蓮もんだけどこれの予備は作ってなくてね〜それに鋼には絶対守護領域がある。だから別に飛べなくてもいい。でも紅蓮は鋼とは違って高起動機体だからね〜データを取る上でも戦闘できないとだめなんだよ。それと初期化と最適化はもともと完了してるから気にしないでいいよ」

「そう・・・風と戦えないのは・・・残念・・・」

「わたしもなっちゃんの戦ってるところ見られないのは残念だよ〜」

「まあ、そういうなよ。簪のデータがあればエナジーウイングの開発も進むと思う。だから頼めるかな？」

「うん・・・!!」

風の言葉に簪は肯定で答える

「頼んだよ」

凧は笑いながら簪にいう

「で、これからどうするの？」

本音は今回ここにあつまった理由を凧に聞く

今回ここに授業中にあつまった理由はまだ凧から知らされていないかった

「ああ、そういえばまだ話してなかったね。今回ここにきてもらったのは簪に紅蓮を渡して最終調整をするためだよ」

「最終・・・調整・・・？」

「そ、紅蓮にはもう飛翔滑走翼をつけてあるからあとは実線で武装の調整をすれば紅蓮は使えるようになる」

「わかった・・・」

「で、わたしはなにをするの？」

本音は自分がここに呼ばれた理由がわからないらしい

「本音には訓練機のラファールで簪の模擬戦の相手をしてもらいたい」

「わたしが？」

本音は自分でいいのかという表情を浮かべながら凧に聞く

「紅蓮のことはまだ知られたくないからね。俺の機体はまだ出せないしデータの整理とかを俺はしないといけないからね。頼めるのは本音しかいいないんだ」

「うん、わかったよ。がんばる!!」

「簪もいい?」

「もちろん・・・」

こうして三人がいだれもないアリーナで簪对本音の試合が行われることになった

代表決定と新たな専用機（後書き）

感想などお願いします

本当によんでいただけたなら一言でもいいので感想を書いていただけるとうれしいです

あとついでに評価も

ではでは次回もがんばった参ります

模擬戦 簀VS本音（前書き）

とりあえず読む前に一言

どうしてこうなった・・・？

模擬戦 簪VS本音

簪の専用機”紅蓮”

その性能実験と最終調整のために模擬戦をやることになった

相手は布仏本音

生徒会の書記にして今回の主役 更識簪 の専属従者である
本人は整備課希望なためISでの戦闘は今回が初めて・・・ではな
かったりする

もちろん二人ともIS学園の入試において教官との戦闘の際にIS
を使っている

結果は二人とも快勝

二人は本来暗部に属する者たち
それゆえにそういったことに対しての訓練はぬかりない

というわけではなかった

理由は簡単

今回の紅蓮の開発者”霧生凧”の影響である

霧生凧、更識簪、布仏本音、この三人は幼馴染である

凧の両親が自殺し、凧が天涯孤独になってしまった時に更識家は凧を引き取った

凧の両親はもともと研究者であった

ISの登場によりその立場を否定された二人は自殺してしまったものの腕は一級品であった

それは暗部の名家である更識家が認めるほどであった

それゆえに更識家はこの少年を引き取ったのだ

「将来必ずや大きなことをする少年である」

それが更識の意見であった

実際凧はその才能と知識への貪欲さからISの技術を今の第三世代に引き上げ若くして倉技研の立場ある存在へと上り詰めた

更識家の予想通りに

だが本人はそれをあまり更識家を当初快く思っていないかった

自分の能力の恩恵を得たいがために行動する蠅ども

それが風の更識に対する当初の認識であった

しかしそこで出会ったのが「更識簪」と「布仏本音」であった

この二人は何の打算もなく自分に接してくれる

いままでそのような存在が身の回りにいなかった風にとってこの二人との出会いは幸運であった

だがそれは風に限った話ではなかった

「更識簪」はその当時姉である「更識風音」（さらしき かざね）
いまの「更識楯無」との才能の差に悩んでいた

その才能ゆえにどんどん実力をつけていく姉

そもそも簪は生まれたその時から姉とは区別されてきた

生まれた瞬間からISの適正試験をされた更識姉妹

あんである楯無は自分よりはるかに高いAランク

それに比べて自分はぎりぎりのCランク

更識家では出来のいい姉 出来の悪い妹

そのように扱われてきた

簪はヒーローアニメが好きだった

ピンチの時にはかならずかけつけて助けてくれるヒーローが好きだった

そして自分を助けてくれるヒーローを求めていた

それが引き取られてきた少年霧生風であった

自分が一番困った気には必ずそばにいてくれる

自分が困って泣きそうな時に必ずそばにいてくれる

簪にとって霧生風とはまさに自分が求めていたヒーローだった

それは本音についても同じだったようだ

本音は最初は自分の主を笑顔にしてくれる存在という認識だった

自分にできなかったことをやってくれる

自分ができないことをたやすくやってのける

感謝という感情は次第に憧れへとかわった

凧は誰に対してもやさしいわけではなかった

どちらかといえばかなり不親切であった

だが凧は自分に気をつかってくれる

やさしくしてくれる

憧れが疑問に変わっていった

そしてある日本音は気づいた

凧は不親切なわけではない

諦めているのだ、と

自分を取り巻く世界にあきらめている

自分のやりたいことしかやらないのは誰も自分を見てくれないから
なのだ

実際凧は幼少の頃より天才であった

それゆえに孤独で

それゆえに誰も彼を理解できなかった

凧は意識していないのかもしれないが彼が笑う時

そこに寂しさを本音は見た

だから気づいた

この男の子は心から笑えないのだと

ここで泣いているのだと

自分を見てほしいのだと

疑問は氷塊し

その心は恋に変わった

そんな二人にとって大事な存在である凧がある日家から消えたのだ

書置きもなく

突如

二人は泣いた

時間さえも感じないほど心が閉じてしまった

だがそんなとき姉である楯無から二人に風の情報が入った

その時更織は風の行方について調べていなかった

また、そのようね命令も出してはいなかった

当時姉はまだ楯無をついでいなかった

なのに風の情報を持ってきた

そう

楯無、風音は独自の情報をかき集めてきたのだ

それこそ死に物狂いで

誰でもない

妹である簪のために

自分の持ちうる力

そのすべてを使って

それから簪は姉にたいして確執を持つことはなくなった

姉よりもたらされた情報は

”霧生凧はIS整備士の試験をpassした”というものだった

そこで二人は考えた

自分たちもISにおいて力をつければ

また凧に会えるのではないかと

その後簪は姉との特訓により日本の代表候補生になり

本音はIS整備の勉強を姉である虚にならないその過程で自身もIS
戦闘の訓練をした

二人はそうしてI S学園に入学した

試験のときの教官はかなり実力があつた

だが恋する乙女の力には勝てなかったらしい

二人はものの5分で勝利した

つまり二人はI Sでの戦闘に関してはかなり高い能力を持っている

簪は純粋な戦闘能力

本音はI Sのそれぞれのスペック、状態を的確につく頭腦的な戦闘能力

タイプは違えども二人の能力は同学年なかでは突出していた

ゆえに凧は自身の最高傑作を簪に託したのだが

さてここまでで分かったと思うがこの勝負どうなるかわからないのだ

簪が使うのは自身の専用機”紅蓮”

本音が使うのは量産機”ラファールリバイブ”

「じゃ、そろそろ始めるけど二人とも用意はいい？」

凧がアリーナで待機している二人へ確認する
ちなみに今アリーナには関係者以外いない

・・・ちゃっかり生徒会長は観客席でみているがまあ、生徒会長だからいいのだろう

「うん・・・」

「いいよ」

二人は準備完了を告げる

「じゃこれから模擬戦はじめるよ」

凧の言葉の直後試合開始のサイレンが鳴る

はじめに動いたのは簪

飛翔滑走翼をフルスロットルにして本音に奇襲を仕掛ける

「はあ！！」

本音を射程に入れると簪は輻射波動を拡散状態にして放射する

「ぐ・・・いきなりだねかんちゃん」

いきなりの奇襲と紅蓮の速さについていけずにもろに食らってしまう本音

「でも、これからだよ!!」

本音はすかさず連装ショットガンをコール

両手に持ちそれをばら撒き打ちする

狙って打っているわけではないが両手から繰り出される弾丸の雨は確実に紅蓮に当たる

「・・・くっ、でも・・・!!」

本音の攻撃に対して簪は輻射波動を拡散状態にして打ち消そうとする

「あまいよ!!」

本音はそういうと自身が持っていたショットガンを簪に向けて投擲する

「!?!?・・・なんのつもり?」

簪は本音の行動がわからなかったが投擲されたそれは輻射波動により粉碎され爆発する

「・・・これは!」

そう

爆発したショットガンにより視界がさえぎられる
本音はすかさず次の武装アサルトカノンをコール

視界がさえぎられているものの本音は先ほどの位置からおおよその
簪の位置を割り出し撃つ

本音の予測はあたり簪は被弾する

「・・・やるね！本音・・・」

「ふふふーわたしだってやればできるんだよー」

簪の言葉に対して本音は自慢げに、誇らしげに答える
実際専用機を使っている簪に対して本音が対抗できるのはすごいこ
とである

いくら慣れていないとはいえ簪の紅蓮は世界最高

それに対して本音のほうは量産機

本来なら勝負にならないはずである

しかし実際はかなりいい勝負になっている

「なら・・・これで！」

簪は近接用武装呂号乙型特斬刀で切りかかる

「まけないよー！」

本音も近接ブレードを展開して迎撃に移る
二人は強烈なつばぜり合いおこす

先に離れたのは簪

呂号乙型特斬刀を消して輻射波動での攻撃に移ろうとする

「逃がさないよう！」

本音はそれを見逃さず五五口径アサルトライフを展開
簪め向けて撃つ

突然の攻撃に対して簪は対応できない

「・・・きゃ！・・・っ」

簪のシールドエネルギーはかなり削られる

本音はその間も武装を展開しては撃ち収納しては展開し撃つ
その間はコンマ一秒にも満たない早業

”ラピッド・スイッチ”

本音はその技術を習得していた

絶え間ない弾幕に簪は攻撃する機会がなくひたすらにかわし続ける

簪のシールドエネルギーはどんどん削られていく

試合開始から15分

すでに簪のシールドエネルギーはつきかけていた

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

シールドエネルギーだけではなく簪の体力も限界に近かった

絶え間なく襲い掛かる弾幕の雨

それをかいくぐり続けるのは容易なことではない

「このままじゃ・・・負ける・・・」

簪は戦意を失いかけていた

凧から専用機をもらったにもかかわらず自分はそれを生かしきれていない

簪はわかっていた

自分の反応速度が紅蓮の反応速度に追いついていないことに

反応速度に体がついていけないことに

ふがいなさを感じていた

凧は自分を信じてこの機体をくれた

でも自分のせいでそれを生かせないでいる

そしていま・・・負けようとしている

いやだ・・・負けたくない！！

凧がくれたこの機体を生かせないまま負けるなんて・・・

私は・・・

負けたくない・・・！！

”最適化完了 神経接続開始 操縦者認識完了 操縦者 更織簪”

簪が負けたくないと強くおもったときそれに答えるかのように紅蓮が最適化を完了させる

本来ISとは初期化、最適化を完了させることで専用機になる

だがこの紅蓮は最初からそれが終わっている

では・・・なぜ？

『あゝ簪 聞こえる？』

簪が疑問に思っていると風の声が聞こえる

「聞こえてるよ・・・で、なに・・・？」

『そろそろ最適化が終わったと思うんだけどどうかと思ってね』

「最適化・・・？それは最初にすんでるんじゃない・・・？」

風は最初に初期化、最適化はすんでいるといていた

ではなぜ今になって最適化が終わったなどというのだろうか？

『あゝ言葉が悪かったね。システムがそろそ簪を認識して簪用に書き換えらら他と思うんだ。いうなら最良化。で、どう？』

「それなら・・・今」

『そっか。さっきまでは俺を想定したものだったからたぶん反応速度が過剰すぎたと思うけど、それならそこが緩和されてるはずだよ』

「わかった・・・いくよ、本音・・・！」

簪は確かめるべくサ再度本音に向かっていく

「忘れられてるのかと思ってたよ……」

本音は先ほどから自分が会話に出てこないめ忘れられていたのではないかと涙目であった

それでも絶え間なく弾幕を張るあたりさすがだろう

だが先ほどまでとは違い最良化がすんだ紅蓮はそれを難なくかいくぐる

「すごい……機体が……私についてくる……！これなら……いける……！」

簪はさっきまでとは打って変わり攻勢に出る

先ほどまでとは違いスピードも動きの切れも各段によくなった起動を本音追いきれない

そして……

「はああああ……！」

簪の右手が本音のシールドにあたり本音を吹き飛ばす

簪はそのまま輻射波導を長距離モードに変え収束させたそれを本音に向けて放つ

ふきとばされ動けなかった本音はそれをもろにうける

そして本音のシールドエネルギーはつきた

『そこまで！勝者 簪！』

簪对本音の恋するおとめの対決は簪の勝利に終わった

結果

簪残りシールドエネルギー56

かなりきわど結果だった

本音も専用機だったら試合の結果は逆だったかもしれない

思わぬところで本音の実力をみた貴重な試合だった

「あれ？私の出番は？おねーさん泣いちゃうぞ？」

そういえばいましたね生徒会長

模擬戦 簪VS本音（後書き）

はい、なんというかもうすみませんでした

なぜか書いているうちに本音がなんか強くなりすぎた感があります

今後どうして行こうかいま思案中です・・・

感想などありましたら気軽に書いて下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8257x/>

IS-インフィニット・ストラトス-知識を求めるもの

2011年11月4日07時12分発行